

平成二十九年 気良歌舞伎

伽羅先代萩

竹之間の場

御殿の場

床下の場

登場人物

竹之間・御殿

政岡

栄御前

八汐

沖の井

松島

小楨

嘉藤太

鶴千代（子役）

千松（子役）

腰元

床下

仁木弾正

荒獅子男之助

鼠

足利家竹之間の場

腰元 政岡様へ申し上げます。

政岡 何事にござりまする。

腰元 仁木弾正様の妹御八汐様、田村右京様の妻女沖の井様、渡辺主水様の妻女松島様、只今おあがりにござりまする。

政岡 ナニ皆様がこのところへ。

腰元 ハア、。

政岡 何はしかれお通し申しや。

腰元 かしこまりました。

政岡 お出迎えを。

皆 ハア、。

呼び お上がり。

政岡 これはこれは、皆様にはうち揃うてようこそ御出仕。我が君様にも今日は余程お心よい御様子にござりまする。

八汐 伯父君鬼貫公の御名代として、執権弾正、御機嫌うかがいとは存じましたれども、男体せし者はお嫌い遊ばす由、それ

ゆえに鶴千代君の御病症お見舞いとしてこの八汐。

沖の井 介添えとして田村右京が妻沖の井。

松島 渡辺主水が妻松島。御機嫌うかがいの御名代。お取次ぎよろしうお頼み。

三人 申します。

政岡 これはこれは改まったご挨拶。なんのお取次ぎに及びましょう。まずまずこれへ。

八汐 さようなれば御免なされて。

三人 くださりましょう。

(ト三人舞台へ来る)

政岡 我が君様へ申し上げます。出仕の衆へお言葉下しおかれましょう。

鶴千代 オ、皆の者よう参った。

皆々 ハア、。

松島 これはこれは。ありがたい君のお言葉。しばらくお目見得いたさぬうち、おとなしゅうご成長遊ばしました、ノウ沖の井。

沖の井 さようにござります。上つ方のお守役はたいのことではござりませぬ。お乳の人にもさぞお嬉しうござりましょう。

なあ。

政岡 これはこれは挨拶、ありがとう存じます。

八汐 イヤ、申しお二人さん。お心安いは常の事。それよりも、言わねばならぬ詮議の筋、早うおっしゃりませいなあ。

政岡 ナニ、この政岡に詮議とは。

沖の井 イヤナニ政岡。今日私ども参りしはお見舞いとは表向き。この程より当館に怪しきことども。若君様の御身の上、鬼貫、

弾正様、早速にも出仕あるべきはずなれど。

松島 これとても若君様には男体せしものをお嫌い遊ばすとの御病症。

八汐 それ故にこそ鬼貫、弾正が名代としてこの八汐。

沖の井 それぞれの役目の名代。

松島 連れたち参りし。

三人 右の次第。

政岡 これはまた何事の儀かと存じますれど、我が君様を思し召しての御忠節。もとよりうち臥し給うほどのことはなけれど、

御殿の内もお廊下の口を限り、いっさいおひろい遊ばされず。男体せしものは、いやじゃいやじゃ、嫌いじゃと、やんち

やばかり仰せられ、男と申さば倅千松。その余の者は御覧のとおり女中ばかり。この政岡を片時もお放し遊ばされぬは

やはり御病気のなせる業かと存じまする。

沖の井 なにはともあれ、朝夕の御膳はおすすみあそばしまするか。

政岡 サア、その御膳がおすすみ遊ばすほどなれば別して案じはいたしませぬが、何をおすすめ申しても、この四、五日は一向

に御絶食にござりまする。

八汐 ナニ。

三人 御絶食とな。

政岡 ハア、。

沖の井 なににもせよ、大事の御病氣。とくと見とどけ参れよとの鬼貫公の仰せ。御名代たる八汐様。私どもは介添えの役。お乳の人のお言葉を疑うではなけれども配膳の品も変わらば、もしや召し上がられまいものでもない。今日の配膳はこの沖の井。御膳番の女中方、御膳をこれへ。

腰元 かしこまりました。

松島 これはよいところへお心がつかれましたのお指図でござりまする。

(ト腰元膳を持ち出して沖の井の前へ置く。沖の井改めて見て、鶴千代の前へ据え)

沖の井 今日の配膳はこの沖の井。すこしなりともお召し上がり下さりませうなれば有難う存じまする。

(ト、鶴千代膳へ手をかけようとするを政岡眼で合図をする)

鶴千代 まだ、まゝは欲しうない。

沖の井 アイヤ、さように御意遊ばしては御身の毒。何なりとも御意に叶いし物を。

鶴千代 いやじゃいやじゃ。早う膳を下げい。

(ト、ハツと言って膳を下げて)

沖の井 なんとも怪しき御病状。

政岡 さようにござりまする。何を差し上げましてもいやじゃいやじゃ嫌いじゃとばかり仰せられまする。お傍に付き添う私
が心の内、ご推量なされて下さりませ。

八汐 そりや御病気というものは、人の心と同じ事、上からは見えぬもの。それを見ぬくは医者役。なぜお薬を進ぜませぬな。

政岡 その儀も存じますれど、ご幼少よりお傍に付き添う医者の大場道益、この程より行方知れず。その余の者は誰とても
男体せし者とは。

八汐 大方そうであろうと思うたゆえ、大場道益が妻小楨、女ながらも名医のきこえある故にお次ぎまで召し連れませ。ソレ、
呼び出しなさんせ。

腰元 ハア。お次ぎに控えし大場道益が妻小槇、御前のお召し。急いでこれへ。

小槇 ハア。

(ト出て来て)

小槇 お召しによって大場道益が妻小槇、これまで罷り出ましてござりまする。

八汐 オ、小槇、大儀大儀。

小槇 これはこれは、誠に有難いお言葉。大切なる若君様の御病氣、定めてお虫の業かと存じますれば、憚りながら私が習いお

ぼえし針術をもちまして。

政岡 ア、イヤ小槇。その御療治は叶いませぬ。

八汐 なぜ御療治が叶いませぬな。

政岡 サアすべて小児はあらかじめまず鍼灸を忌むという。「千金方」といえる書に詳しく記しあるそうにござりまする。まして余の薬と違い、毒味のならぬ針術はわずか一分一厘の相違にてもし経絡を失うときは、たちまち命を落とすとある。さようなこともござりますまい。なれども未だ御幼少の若君様、止めましたは私がよもあやまりではござりますまい。

八汐 そのような難しいことは存じませぬが、御病氣さえ治ればそれでよいじゃござりませぬか。

政岡 御病氣とは申せ、鶴千代様は大事の御身。もしもの事がある時は、たちまちお家の乱れとなる。この程よりの御膳といい、うかつに療治は叶いませぬ。

松島 なるほど。さりながら御病氣のことなれば、そのままにもなりますまい。ただ御容態を伺うたうえでの御決定がよろしかろうと存じまする。

八汐 オ、ソレソレ。針の灸のというほどに、いろいろと理屈がついてむつかしい。ただお脈ばかりを。

政岡 お脈とあらばともかくも。

八汐 ソレ小槓^{こまき}。お脈を早う。

小槓 さようなれば伺いますのでござりましょう。

(ト小槓居直る。政岡、鶴千代を膝にかけさせる。脈の降り終わると、元の位置へ)

小槓 必死のお脈にござりまする。

政岡 ナニ、必死の。

皆々 お脈とな。

小槓 このお脈は覆溢^{ふくいっ}と申しまして覆^{ふく}は覆^{おお}う、溢^{いつ}はあふるゝ。上より下へ傾き、内より外に出^いずるお脈。こりや、病ま^いずして死を逃れ給わぬというお脈^{みやくてい}体にござりまする。

八汐 ナニ、覆溢のお脈とな。小槓大儀^{こまき}であった。次ぎへ下がって休息しや。

小槓 さようなれば御免なされて下さりませ。

(ト小槓は下手に入る)

八汐 察するところ、このお館の内に若君を害せんとうかがう曲者^{くせもの}ありと覚えたり。

沖の井 いかさま、それも計られず。

松島 かゝる時節のことなれば。

腰元一 御殿のくまぐま、お庭の隅々^{すみずみ}。

腰元二 手分けをなして曲者を。くせもの

腰元三 詮議をするのがお傍の役。せんぎ そば

腰元四 そんなら皆様。

腰元一 ドレ。

腰元皆 わたしらが。

(ト、立ちかゝるを八汐思い入れあつて)

八汐 ヤア、騒ぐまい。女中方。じょちゆうかた このお館の内にて覆溢ふくいつという死脈。覆はおとう、溢いつはあふるゝ。上より下へ傾き、内より外へ

いずる脈体。みやくてい 察するところ、曲者くせものはこの天井に忍びありと覚えたり。ソレ、女中方。じょちゆうかた

腰元皆 心得ました。

(ト、腰元下手へ入り、長刀を取り、天井を突く)

腰元皆 エイ。

(ト忍び嘉藤太、上より飛び出て)

嘉藤太 鶴千代観念。

(ト言いながら沖の井にかゝる立廻り。嘉藤太を当てる。腰元綱にて縛る。腰元活を入れる。嘉藤太のそばへ行き)

腰元一 こりや曲者。くせもの そちや何者に頼まれてこの天井に忍び入り。

腰元二 若君を害せんとはかりしぞ。

腰元三 これには定めて頼み手あろう。

腰元四 白状によつては命助くる。

腰元一 サアまっすぐに。

皆々 白状しや。

嘉藤太 イイヤ、知らぬ。覚えはない。

腰元一 言わぬとあれば私らが。

腰元二 この長刀ながなたに。

皆々 かけるぞえ。

嘉藤太 イイヤ、知らぬ。覚えはない。

腰元一 言わずば。

皆々 こうして。

嘉藤太 アいたゝゝゝいたゝゝゝ。白状するからゆるめて下され、ゆるめて下され。

腰元一 サアまっすぐに。

皆々 白状しや。

嘉藤太 背せなを断ち割り、なまりの熱湯、切り身に塩の拷問ごうもんでも、頼まれたことは言うまいと誓いはしたけれども、手詰めてづになれば

是非がない。たかがこうだ。鶴千代殿を殺してくれろと頼まれた。

腰元一 して、その。

皆々 頼み手は。

嘉藤太 サ、その頼み手は。

皆々 何者じゃ。

嘉藤太 その頼み手は。

(ト、これにて八汐は政岡と言えというしぐさ)

嘉藤太 ほかでもない。そこにいる政岡殿に頼まれた。

政岡 なに、この政岡が頼みしとは、あと方もなき偽り者め。

嘉藤太 コレサコレサ政岡殿。あれほど頼んでおきながら、今更となって白々しい。もう隠しても隠されまい。

政岡 ア、聞えた。察するところ、この政岡を罪にとつて落とさん企み^{たく}。何者に頼まれた。サアまっすぐに白状しや。

八汐 上から見えぬ人心^{ひんしん}。ハ、テモ恐ろしい企み^{たく}じゃな。

政岡 これはまた八汐様のお言葉とおぼえませぬ。大事の大事の若君様。御成長あそばすを指折り、日を数えこそすれ、どう致しましてももつたいない。

八汐 おっしゃんな、政岡。若君を亡き者にして、千松を世に立てたいというこなさんの企み^{たく}。コレ、曲者^{くせもの}よう白状しやつた。そちの科^{とが}は許してつかわす。ソレ、いましめ解いておやりなさんせ。

腰元 ハッ。

八汐 ハテ、解いてやりやというに。

腰元 ハア、。

(トいましめを解く。嘉藤太思い入れあつて、刀を納め)

嘉藤太 ヤレヤレすんでのことに大事の命を。

(ト思い入れ)

嘉藤太 ドレ、そろそろと帰ろうか。

(ト花道へ行きかける。松島、思い入れあって)

松島 曲者くせもの待ちや。アイヤ、詮議せんぎが残った。待てと申さば、マアマア待ちや。

(トきつと言う嘉藤太思い入れあって、立ち戻り、沖の井に向かい)

嘉藤太 何もかも白状したこのおれに、何で詮議せんぎが残ったのだ。

腰元皆 下にいや。

八汐 こりやおかしいわいなあ。あれほどに明白くせものに白状した曲者くせもの。科人とがにんは政岡でござりまする。

松島 サアその政岡は乳人めのと役。まこと若君を害せんと思わば廻り遠い人手を頼もうよりほかに手立てがありそうなもの。わずか

天井の破れより己と飛び下り即座の白状。

嘉藤太 ヤ。

松島 ても頼もしい頼まれ手。

嘉藤太 覚悟。

(ト松島に切つてかゝるを松島当てる。嘉藤太悶絶する)

松島 察するところ政岡を罪に取って落とさん企たくみ。そこらあたりに頼み手があるまいとは申されまい。そこを思わたくしうて私とどが止

めましたも、よもあやまりではござりますまい。

八汐 いろいろと理屈をつけて御贖なさんしても逃れぬ証拠見せましよう。この程塩釜明神の神木の根方より取り出したるこれなる願書。読み上げなさんせ。

(ト願書を出して渡す。腰元開き見て)

腰元 かしこまりました。ひとつ、大小の神祇を驚かし奉る。当時、足利の跡目たる鶴千代君が命、断ち終わった後、我が子千松をもつて家督に立てんこと、請い願ひ奉る。たまたま毒殺をもつて除かんとすれば、鬼貫、弾正が忠臣にて事ならず。我々が失望、我が倅をもつて家督に立てんこと、神明感応あらんものか。百拝敬首、所願成就なさしめ給え。願主乳人政岡、荒獅子男之助、敬つて申す。

(ト、皆々驚く)

八汐 サこれほど確かな証拠があつても、まだ言い訳がござんすか。

政岡 エ、汚らわしい。その願書。この身にとつて露いさゝか、みじん覚えはござりませぬ。

八汐 イヤイヤ、このうえは鬼貫公の御前へ引いて白状さす。政岡立ちや。

沖の井 アイヤ、こりや政岡の企みでないという証人はこの沖の井。

八汐 また、こなさんも理屈かいなあ。これほど確かな証拠があつても。

沖の井 それじゃによつて政岡の企みでないという証人はこの沖の井。こりや、外々より科をぬる拵え願書。

八汐 なんでこれが拵え願書じゃえ。

沖の井 サア。すべて神仏に祈誓を立てるには、何の年の男、女と書くがこれ法式。それになんぞや、文の取り遣りするように、銘々の名をしるしましよや。まっこの如く、事あらわれしその時に、姓名がしるしあらば我と我が身を訴人も同然。こ

れほどの事企らむ者がうかうか我が名を記しましうや。もしこの願書に八汐と書いてあったなら、あなたは罪に落ちまするか。

八汐 ヤ。

沖の井 さりとてはあさはかな企み。たつて御詮議遊ばすと却つてあなたにお疑いがかゝるまいものでもござりませぬ。

八汐 ハ、よう言い廻しなさんしたなあ。ほんにあなたは御發明な。したが、私は鬼貫公の御名代。そなたは介添えの身を以つて言葉がすぎる。右京が名代、利口ぶらずと控えてござんせ。サ、政岡。もう若君のお傍へは叶わぬ。今日からはこの八汐が乳人役。

政岡 すりや、君のお傍勤めをば。

八汐 そつちの都合は悪かろうが、お傍へは叶わぬ。お下がりなさんせ。

政岡 それじやと申して。

八汐 鬼貫公の御意に背くか。

政岡 まったく以つてさようでは。

八汐 さようでなくばお前はお下がり。お下がりなさんせ。お下がり、お下がりお下がりお下がり……。伯父君の御意じやがや。

政岡 ハハア。

(ト八汐、鶴千代の傍へ行き)

八汐 申し若君様。今日からはこの八汐が乳人役。ほんにまあ、お仕合わせな和子様ではあるわいなあ。ホ、ホ、。

鶴千代 イヤ、そちは嫌いじゃ。乳母うばを呼べ。

八汐 ほんにお子達という者は聞き分けのない。なんぼそのように御意遊ぎよばしても、あの政岡は獄屋ごくやへ入れねばなりません。

鶴千代 政岡を獄屋ごくやとやらへ入れるなら、予よも一緒に行こう。

千松 御前様ごぜんがおいで遊ばすなら、私わたしもお供いたします。

鶴千代 オ、千松も来い。獄屋ごくやへ行つて遊ぼう遊ぼう。

政岡 イヤ申し、若君様。その獄屋ごくやと申すところは、お遊びあそばすような処ではござりませぬ。それはそれは恐ろしい怖い処でござりまするぞ。

鶴千代 そのような恐ろしい処へなぜそち一人やろうというのじゃ。

八汐 なんぼ頑がん是ぜないとて、よう御合点ごがてんあそばせや。あの乳母うばはな、あのような者を頼んであなた様を殺そうと致しまする。オ、こわやのこわやの。ほんにまあ恐ろしい奴でござりまする。

鶴千代 イヤ、予をかわいがる大事の政岡。予は殺されても大事ない。なんぼうでもいやじゃいやじゃ。

政岡 すりやたとえお命をお落としあそばそうともこの政岡と一緒に行きたいというそのお言葉、有難うござりまする、有難うござりまする。

八汐 なんのそれが有り難かろう。言い訳の立つまでは政岡立ちや。

鶴千代 八汐待て。

八汐 またお止めとどめあそばしまするか。

鶴千代 それほど獄屋ごくやへやりたくば政岡が代わりにそち行け。

八汐 マ何を仰ります。科人とがにんの代わりにこの八汐に行けとは阿呆らしい。それなれば政岡の代わりにあの千松をやりましょう。

鶴千代 その千松も予が家来じゃ。

八汐 テモ鬼貫公おにつらこうの仰せ故。

鶴千代 その鬼貫おにつらも予が家来じゃないか。家来のくせに予の言うことを聞かぬ奴は皆獄屋ごくやへ入れい。

八汐 それじゃと申して。

鶴千代 主しゅの言葉を用いぬか。

八汐 まったく以って。

鶴千代 言葉を背くか。

八汐 サアそれは。

鶴千代 切ってしまうぞ。

(ト刀へ手をかけて立つ)

沖の井 暫く暫く……。暫くお静まり遊ばしましょう。

八汐 よう仕込んだものじゃなあ。

沖の井 大国をしろし召さるゝ御器量かんじんたいどあらわれ、寛仁大度の今のお言葉。このうえは御意ぎよいの通り、政岡をお傍におきますれば御機

嫌お直し下さりましょう。暫く暫く……。サこのうえは忠義の心いよいよあらわれ、若君様のお役にたつき乳人政岡めのと。

八汐 スリヤ、この八汐の言う事は。

沖の井 反故ほじにはならねど私共はお添え人の役目を蒙かぶるうえからは、御意ぎよいに背くは第一不忠。

八汐 ムツ。

沖の井 サア、言わぬは言うにいや勝ると。いつかその身に嵐吹く御室の山の紅葉葉は竜田の川の錦なりけりとサ。執権職を嵩に着て、今の言葉の仇嵐。人の忠義を吹き散らす色も八汐の紅葉葉は竜田の川の錦にも、まさりて深き若君のお乳の人への情けのお言葉。あなたはなんとお聞きあそばす。

八汐 ありや頑是のない小児のわやく。

沖の井 たとえ頑是がござなくとも五十四郡をしろしめす君の上意に背いては臣下の道が立ちまするか。

八汐 鬼貫公の仰せ故。

沖の井 鬼貫公は伯父君でも執権職を賜らば鶴千代君とは主従の礼を乱して、あなたこそなんと無礼であるまいか。

八汐 でも私は御名代。

沖の井 あなたばかりが御名代で、この沖の井や松島は名代ではござりませぬか。我がまま気ままの今のお言葉。このことお表へ申しませうか。

八汐 サアそれは。

沖の井 ご返答がござりまするか。あるなら承りませう。

二人 サアサアサア。

沖の井 足利九代の主たる鶴千代君の御前において言葉がすぎる。八汐お控えなさんせ。控えてござんせ。

八汐 そんならどうなと御勝手次第。

沖の井 そりゃこうのうては叶わぬ事。このうえは政岡には君のお傍へ。

政岡 ハア。

(ト政岡行こうとするを八汐にらむ)

沖の井 何をご遠慮。政岡召します。

政岡 ハ、。

(ト政岡、鶴千代の傍へ)

政岡 我が君様、有難う存じます。

沖の井 してその御膳ごぜんは。

政岡 その御膳ごぜんは私が。

沖の井 そりや、ともかくも。女中方じょちゆうかた、その曲者くせものを広庭ひろにわへ。

八汐 アイヤその曲者くせものは私が預かり、きつと詮議せんぎを。

沖の井 すりやあのあなたが。

八汐 おいのう。

沖の井 ハテなあ。

(ト、時計、八つの刻になる)

松島 若君様には先ほどより余程のお気鬱きうつ。席をお移しあそばしませ。

沖の井 我が君様にはまず。

皆々 入いらせられましょう。

八汐 とは言え、政岡。

政岡 アイヤ、御意ごいにござりまする。

(ト、皆々入る。嘉藤太、八汐残り)

嘉藤太 八汐様。

八汐 コレ。

嘉藤太 しからばこれより。

八汐 行け。

(幕)

足利家奥御殿の場

〴〵おしあけ入りにけり。

〴〵あと見送りて政岡がまさなき事も身にかゝる科は晴れても晴れやらぬ養い君の行末を誰に問うべきようもなく心ひとつの憂き思い、
物案じなる母親の顔をながむる千松に鶴千代君も打ち守り。

鶴千代 コレ乳母。もう何言うても大事ないかや。

政岡 アイアイ、もう誰もおりませぬ何なりと御意あそばせ。ほんにさつきに沖の井殿、若へ御膳を上げた時、かねて乳母が申せし事、お聞き分けあそばしてようマアお上がりあそばさなんだな。それでこそこの乳母がお育て申した若殿様。おでか
しなされた、あつぱれな。

〴〵誉めればあどけなき稚氣に。

鶴千代 ノウ乳母、ひもじいということは強い武士の言わぬことじゃと、常々そちが言うたゆえ、おれは言わねどさつきにから、
空腹になったわやい。

政岡 オ、お道理でござりまする。今日は思わぬことゆえに御飯の拵えも遅うなり、あなた様にもさぞお待ちかね。千松もよ
う辛抱しやつたのう。もう拵えてあげまする。

〴〵と立ち上がれば。

鶴千代 ノウ乳母。これにあるこの膳、これを食べては悪いかや。

政岡 アイヤ申し。その御膳をあぐるほどなれば乳母も苦勞は致しませぬ。マアようお聞きあそばせや。今お館には悪人はびこ
り、御近習、小姓、膳番までちつとも心許されず。忠臣の男之助は讒者のために遠ざけられ、力とする者もなく、朝夕の

御膳は皆庭へ捨てさせて、私が手ずから拵こしらえてさしあぐるも、もし毒、毒薬の企たくみもと、みじんも心許されず。御空腹な
もお道理ながら御前のお堪えあそばすため。サ、早うまをあげざるまい。ドレ。

へ拵えようとする折りからに。

腰元 政岡様へ申し上げます。

政岡 何事にござります。

腰元 管領山名様の奥方、栄御前様、若君様の御病氣御見舞として只今これへおあがりにござります。

政岡 ナニ栄御前様の御入りとな、この由を皆様へ。

腰元 かしこまりました。

政岡 コレ千松。常々母が言うたこと、かならずかならず忘れまいぞや。

(ト奥へ入る。この時奥にて)

八汐 栄御前様の御入りとあれば、いざ御出迎おでむかい。

三人 いたしましょう。

(ト、これにて奥より八汐、沖の井、松島、出で来たり、居並ぶ。ト、向こうより栄御前)

呼び お入り。

政岡 栄御前様のお入りとあつて、病中ながら館の主、鶴千代丸、介添えとして乳人政岡。

八汐 執権弾正が妹八汐。

沖の井 田村右京が妻沖の井。

松島 渡辺主水が妻松島。

政岡 これまでお出迎い。

皆々 致しましてござりまする。

栄御前 どれどれもお出迎い大儀。

政岡 まずまず。

皆々 これへ。

栄御前 許し召され。

(ト舞台上手へ住まう)

政岡 栄御前様へ申し上げます。今日の御入り、御用の筋仰せ聞けられ下さりませうなれば、有難う。

皆々 存じまする。

栄御前 管領家よりの上意。

皆々 ハア、。

栄御前 今日わらわ参りしは当家の主鶴千代殿にはご病氣とあつて、男体せし者をお嫌いなさると聞きしゆえ、夫に替わるこの

栄、とくと容態見届け参れよとの言いつけ。ことには食事も進まぬ由。何がなお口に合うものをと管領家より下されしこ

の菓子、賞翫あらば使いに参りしわらわが大慶。コレ八汐、よしなに計ろうてたも。

へ持たせし菓子箱、差し出せば、八汐ひとりふた押し開き。

(ト腰元、八汐の前へ菓子折おく。八汐ふたを開け)

八汐　　でもマア見事。結構なこの御菓子。イザ召しませ。

(ト二重の上へおく)

いざ召しませと差し出す。さすが童の嬉しげに、手を出し給えば。

(トこれにて鶴千代手を出しそうにするを政岡止め)

栄御前　コレ、政岡、そちやなぜ止めた。

政岡　　サアそれは。

栄御前　管領家より下されし大切なこの御菓子。怪しいと思つて止めたか。

政岡　　まつたくもつてさようでは。

栄御前　疑いかけし乳人政岡、こりやこのままには捨て置かれぬ。

沖の井　ア、イヤ、栄御前様へ申し上げます。只今政岡が止めましたるはこの程典薬どもより禁じましたる毒忌みもの。

松島　　押さえ控えは乳人の役。それゆえ、只今のようにおとどめなされたのでござりましょう。ノウ政岡。

政岡　　さようにござりまする。

栄御前　すりやこの御菓子に怪しいことがないと言やるか。

政岡　　なにしにさような。

栄御前　そんならそなたなぜ勧めぬ。

政岡　　サアそれは。

栄御前　わらわが勧めようか。

政岡 サアそれは。

兩人 サアサアサア……。

栄御前 政岡なんと。

〜と権柄けんべい押し。奥より走つて千松が。

(ト奥より千松走り出で来たり)

千松 この菓子一つくだされや。

〜なんの頑がんせ是もただ一口、蹴ちらかしたる折は散乱。八汐はすかさず千松が首筋片手に引き寄せて、懐剣ぐつと突つ込めば、わつと一

声、七転八倒。驚く沖の井。政岡が仰天ぎやうてんながら一大事と若君抱いだき守り居る。

(ト、千松、菓子を食うことがあつて苦しむ。八汐驚き、千松をひきつけ、胸元へぐつと突つ込むこと。政岡は鶴千代を
困い、沖の井きつとなつて)

沖の井 ヤア事の実否じつひもたださぬうち、なに科とがあつて千松を。

松島 手にかけれし八汐。

沖の井 返答が。

二人 承りたい。

〜と詰めよれば。

八汐 なにをざわざわ騒ぐことはないわいの。かたじけなくも管領家かんれいけよりくだされしこの折、踏みわりしは上かみへの無礼。手にか
けたはお家を思う八汐が忠節。かわいそうに、痛いかいなあ痛いかいなあ。他人のわしさえ涙がこぼれる。コレ政岡、現

在のそなたの子、悲しうはないか。

政岡 なんのマア、お上へ対して慮外せし千松。御成敗はお家のおため。

八汐 そりやあの、これでもか、これでもか、これでもか。

へなぶり殺しに千松が苦しむ声の肝先へたゆるつらさ、無念さを、じつと堪ゆる辛抱は、たゞ若君が大事ぞと、泪一滴目に持たぬ男まさりの政岡が、忠義は先代末代まで、またあるまじき烈女の鏡、今にその名は芳しき。栄は始終政岡がそぶりに気を付け、うちほへ笑み。

栄御前 出かした八汐。管領家よりくだされし大切なこの御菓子。よしない小児が差し出たゆえ、大事の企み……。サア、大事の菓子を荒らした科、手にかけては八汐が働き。あつぱればあつぱれ。

八汐 さまでもないこと、お誉めに預かり有難う存じまする。

栄御前 このうえは政岡に申し聞かす仔細もあれば、皆の者はしばらく次へ。

八汐 そりやあの。

三人 私共は。

栄御前 遠慮してたも。

三人 ハア、。

へと、栄の言葉、なんと言えんも沖の井が、深き心はわだつみの汐の八汐もうちつれて伴い入りにける。あとさき見廻し栄御前、政岡がそばへすりよつて。

(ト、八汐、沖の井、松島、こなしあつて奥へ入る。栄こなしあつて)

栄御前 政岡近う。

政岡 ハ、。

栄御前 年頃仕込みしそなたの願望成就してさぞ満足にあろうのう。

政岡 なんとおっしゃる。

栄御前 隠すに及ばぬ。東西分かぬそのうちより取り替え子ということは、とくよりそれと知つたれども、もしやと思ひ、最前より始終の様子うかがい見るに、血を分けた我が子の苦しみ、なんぼ気強い親々でも、堪えられるものではない。たしかな証拠見るうえは、そなたに見する一品あり。

(ト懷中より連判状を出して渡す。政岡開き見て)

栄御前 政岡、披見しや。

政岡 ハッ。鬼貫公をはじめとして、家中の諸武士は過半お味方。

栄御前 ア、コレ。ひそかにひそかに。何かのことは八汐に言い付けおいたれば万事よしなに。

政岡 してこの品は。

栄御前 そなたにしかと預けおくぞよ。

政岡 すりやこの連判を私に。あの私に。しかとお預かり申しまする。

栄御前 わらわはこれより立ち帰り、始終の様子申しあげん。

政岡 しばらくしばらく。

(ト手を打つ。腰元下手より出る)

政岡 栄御前様のお立ち。

腰元皆 ハア、。

栄御前 政岡近う。かならず人にさとられまいぞ。

へひとり呑み込み、悠々と館をさして立ち帰る。

(ト栄御前思い入れあつて、腰元付き添い向こうへ入る)

へあとには一人政岡が奥口うかがいがいて、我が子の死骸うち見やり、堪え堪えし悲しさを一度にわつと溜め泪、せき入りせきあげ歎きしが。

(ト政岡思い入れあつて千松の骸を見て)

政岡 コレ千松よう死んでくれた。でかっしゃったでかっしゃったでかっしゃった……でかっしゃったよなあ。そなたが命捨てたゆえ、邪智^{じゃち}深い栄御前、取り替え子と思ひ違ひ、おのれの企^{たく}みをうちあけて、連判までも渡せしは、親子の者が忠心を神や仏もあわれみて、鶴千代君の御武運を守らせ給うか、チエ、有難い有難い……有難やなあ。それというのもこの母が常々教えおいた事、幼な心に聞きわけて、手詰めになつた毒薬をよう試みてもつたなあ。よう試みてもつた……よう試みてもつたなあ。

コレ千松、そなたの命は、出羽奥州五十四郡の一家中、所存のほぞを固めさす、まことに国の。

へ礎^{いし}ぞやとは言つものの、可愛いやなあ、君の御為兼ねてより、覚悟は極めていながらも。

政岡 せめて人らしい者の手にかかつても死ぬ事か、人もあろうに弾正^{だんじょう}が妹づれの刃にかゝり。

へなぶり殺しを現在に傍に見ている母が気は。

政岡 どのようなであろう。

「王さまあ、どうであろう。」

政岡 思い廻せばこの程よりうとうた唄に千松が。

「七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ。」

政岡 二年待てどもまだ見えぬと、唄の中なる千松は待つ甲斐あつて、父母ちちははに顔をば見せることもある。同じ名のつく千松のそなたは百年待ったとて、千年万年待ったとて。

「何の便りがあるうぞいのう。」

政岡 三千世界に子を持った親の心は皆ひとつ。子の可愛さに毒なもの食べなと言うてしかるのに、毒と見たらば試みて、死んで……、死んでくれいと言うような胸欲非道な母親がまたと一人あるもので。

「武士たねの胤たねに生まれたは果報か。」

政岡 因果か。

「いじらしや。」

政岡 死ぬるを忠義ということは。

「いつの世からのならわしぞ。凝りかたまりし鉄石心、さすが女の愚にかえり、死体にひしと抱きつき、前後不覚に歎きしは理せめて道理なり。後ろにすつくと八汐大声。」

八汐 様子はあれにて残らず聞いた、こちの企みの妨げ女、おのれも生けてはおかれぬわい。政岡覚悟。

（ト懐剣にて斬ってかかる。八汐を一刀斬る。この時、政岡連判状を落とす。差し金の鼠出て、連判状をくわえ消える。）

奥より沖の井、松島、腰元皆々出て

政岡 ヤ、詮議の種の一巻を鼠がくわえて。

皆々 アレアレアレ。

沖の井 女ながらも謀反むほんの片割れ。

政岡 我が子の仇かたき。

松島 お家の仇あだ。

政岡 天命思い、知つたるか。

(幕)

足利家床下の場

(男之助、鼠を踏みつけ見得)

男之助 アアラ怪しやな。今荒獅子男之助照秀がねい人ばらの讒言によつておん目通りを遠ざけられ、御寝所間近の床下に宿直なすともイザ知らず。伺いよつたどぶ鼠、うぬもただの鼠じゃあんめえ。この鉄扇を食らわぬうち、一卷渡し、消えてなくなれ。

(ト鉄扇にて鼠を打つ。鼠花道へ行き飛び込む。弾正連判状をくわえて出る)

男之助 曲者。

(ト弾正小柄を抜き)

男之助 合点だ。

(ト受け止める。男之助後へ下がる)

男之助 取り逃がしたか。残念だ。

(ト見得。幕)

(ト弾正一卷を懐中にしまい笑う。見得、悠々と向こうへ入る)